

「ESDの10年・世界の祭典」
2011年度事業化ワークショップ 第2回中間総括
DESD World Festival Forum Planning Workshops 2011
Comprehensive review meeting #02

課題別ワークショップのご案内

ESDの10年・地球市民会議2011 2日目プログラム内

2011年9月18日(日)
September 18, 2011

地球市民交流センター
Global Center, Expo Memorial Park

全体ファシリテーター 川嶋 直
Conference Facilitator: Tadashi Kawashima

財団法人キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー、公益社団法人日本環境教育フォーラム理事、立教大学ESD研究センターCSRチーム主幹、
「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム理事
Senior Advisor for KEEP [Kiyosato Educational Experiment Project] Inc., Board Member of Japan Environmental Education Forum, Leader of CSR Project Team, ESD Research Center, Rikkyo University, Board Member of the Global Citizen's Conference on DESD

このワークショップは平成23年度独立行政法人環境再生保全機構
地球環境基金の助成を受けて開催されます。



- 個別ワークショップの部屋割りについては、必ず現地会場の案内をご確認ください。
- 本資料に掲載された情報は2011年9月6日時点に決定しているものです。
- プログラムや登壇者等は予告なく変更する場合がございます。何卒ご了承くださいますようお願い致します。

1. 国連大学RCEイニシアチブ

地域に根ざしたESDのネットワークづくり～RCEのこれまでの成果と課題～

本ワークショップ ご案内

国連大学は2005年から全世界でESDの地域拠点(RCE)づくりを進めています。日本では6つの地域がRCEとして地域のESD推進ネットワークづくりに取り組んでいます。

本ワークショップでは、これまでの実績に基づいて、RCEによるESD推進の成果と課題を振り返り、今後の展望を考えます。

また、東日本大震災の経験と今後のESDについて、日本から世界に発信していく素案づくりを行います。

これまでの検討 ダイジェスト

これまで、「ESDの10年」最終年会合に向けて、RCEとして何を発信するかを議論してきました。

その中で、RCEの多様性や市民力をアピールすることや、2014年には、ESD/RCE活動を通しての学習者の変化や成長だけでなく、地域がどのように豊かになったかも評価すべきなどの意見が出ました。

また、RCEの実践の成果物の作成についても検討しています。

本日のミッション

< 課題・論点 >

RCEのこれまでの成果と課題、今後の展望

RCEの特徴、変遷

東日本大震災とESD

< 獲得目標 >

各RCEのこれまでの成果と課題、今後の展望について

RCEの共通点、違いについて共通認識を持つ

東日本大震災を踏まえてのESDのあり方について協議する

RCEの紹介

RCEとは、Regional Centers of Expertise on Education for Sustainable Developmentの略で、一定程度の地域を表しており、多様な立場の人たちによるESDの革新的な対話の場を目指しています。

世界では、2011年8月末現在、85地域が国連大学から認定されています。

現在国内では、仙台広域圏、横浜、中部、兵庫ー神戸、岡山、北九州の6地域が、多様なステークホルダーをネットワークしながらそれぞれのやり方でESDに取り組んでいます。

スピーカーについて

RCE仙台広域圏、RCE横浜、RCE中部、RCE兵庫・神戸、RCE岡山、RCE北九州の全国のRCEからゲストスピーカーを迎え、参加者と議論します。

2. ユネスコスクールプログラム

本ワークショップ ご案内

ユネスコスクール(UNESCO Associated School Project Network: ASPnet)は、「ユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校」であり、世界180以上の国・地域で9,000校以上が参加しています。日本では、ESDの推進拠点として国の政策に位置づけられており、近年急速に拡大し、ネットワークを広げています。

ユネスコスクールが2014年およびその後に向けて、また特に2011年3月11日の東日本大震災からの教訓を受けて、ESDの広がりや深まりにどのように貢献していけるか、議論を続けています。

これまでの検討 ダイジェスト

【東日本大震災との関連】

ESDIは、ESD先進地である気仙沼市において、震災復興に対して以下の面で貢献している。

- ① 判断力・危機対応力
- ② 地域に根ざし、地域とつながること
- ③ ESDグローバルネットワーク
- ④ 地域社会の未来をデザインする力
- ⑤ 未来へのこころざし

【2014年までにどうありたいか】

- ユネスコスクール数の増加(教員の意識改革を含む)
- 地域(地域、企業、大学、NPOなど)とつながるユネスコスクール(地域の持続可能性につながり、ESDの理念の実現となるように)

【そのためには何をすべきか】

- トップダウンとボトムアップの双方のアプローチが必要(校長会や公の場でESDの理念を語らう場を増やそう)
- 地域が学校の活動をしっかりと見守れるような制度を作ろう。
- 地域や企業、大学等との連携は組織化が必須。
- ESDコーディネーターがNPOや企業、地域と連携して設置されればユネスコスクール(学校側)との連携が容易となる。

本日のミッション

< 課題・論点 >

- 1) 2014年にユネスコスクールはどうありたいか / 何をしたいか
(ポストDESDを視野に入れて)
- 2) その実現のために2014年までに何をすべきか
- 3) そして今何をすべきか

< 獲得目標 >

上記に対しての、アイデアを広く、また具体的に。

ファシリテーター

柴尾智子:

財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)事業部次長。ACCUではアジア太平洋地域におけるESD・ユネスコスクールの振興とネットワークに関わる諸事業を行っている。

ゲスト

永井壽子(千葉県立佐倉南高校長)

伊井直比呂(大阪府立大学准教授)、

池端弘久(石川県金沢市立中央小学校長)

3. CSR×ESDプログラム

本ワークショップ ご案内

ESDをより広く推進するためには、企業への浸透と実践が不可欠という問題意識のもと、企業が進めているCSR活動を、よりESD視点に沿った形で推進してもらうための方策を語ろう、ということでスタートしました。

これまでの検討 ダイジェスト

- ・2014年を「ESDイヤー」として、様々な活動をそこで顕彰しよう。
- ・「ESD大賞」を設けて企業のESD的な活動を広くとりあげよう。
- ・「大賞」のための評価基準を作ろう。
- ・「ESDイヤー」の制定を、民間だけにとどまらず政府にも提言していこう。
- ・企業内でESD人材育成のためのプログラムを推進してもらおう。
- ・「ESD休暇」などの新しいESD的な制度の採用を働きかけよう。

本日のミッション

- これまでの議論を振り返り、その内容が魅力的かどうかを検討します。
- その路線が正しい(=企業にとって魅力的な提言である)という結論に至った場合には、上記のテーマを具体化するためのアイデアを検討します。
- そもそも、今、企業にとって「持続可能な開発」というのがどういうことなのかも議論し、そのために何ができるのか、考えてみたいとも思います。

ファシリテーター

中野民夫:

ワークショップ企画プロデューサー&会社員(博報堂勤務)。企業で環境やCSRやNGO関連業務を担当。また、人と人、自然、自分自身、社会をつなぎなおすワークショップを実践。立教大学ESD研究センターCSRチーム研究員。立教大学院、明大、聖心女子大兼任講師。主著に『ワークショップ』、共著に『次世代CSRとESD』など。

ゲスト

川廷昌弘:

一般社団法人CEPAジャパン代表

チーム・マイナス6%立ち上げ直後から関わり環境コミュニケーション領域に専従。COP10のCEPA決議で提言し成果を挙げた。国際自然保護連合教育コミュニケーション委員会メンバー、国連生物多様性の10年日本委員会委員、日本写真家協会会員など。

新谷大輔:

株)三井物産戦略研究所研究員(在シンガポール)。CSR、NGO/NPO、ソーシャルビジネス、アジアにおける地域研究を専門分野とする。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科講師、特定非営利活動法人ACE理事など。主著に、『アジアのCSRと日本のCSR』(日科技連出版、2008年)などがある。

4. NPO/NGOプログラム

2014年を活用するNGO/NPO連携プロジェクトを描こう

本ワークショップ ご案内

ESDを推進・実践してきたNGO/NPOと、ESDはそれほど意識していないけれど、持続可能な社会に向けた活動や教育を展開してきたNGO/NPOが、2014年を活用する共通プロジェクトのアイデアを出し合うWSです。ぜひご参加ください。

これまでの検討 ダイジェスト

8月11日に立教大学で行われた第一回WSでは「2014年をどういう年にしていきたいか」を話し合い、「市民が自分で考え参加する社会に」「ESDの実践が広がる仕組みを作る」などのビジョンを共有しました。そしてその実現に向けて、一緒に取り組みたい活動についてアイデアを出し合いました。

(出てきたアイデアの一例)

- ・PR: ソーシャル・アート・アワードやESD的なテレビ番組への相乗り作戦
- ・実践: 子どもが議論し、声を出し、大人が耳を傾ける場づくり

本日のミッション

< 課題・論点 >

ESDはそれほど意識していないけれど、持続可能な社会に向けた活動や教育を展開してきたNGO/NPOと、どう2014年を共通のメルクマールにできるか？

< 獲得目標 >

2014年にどうありたいか？のイメージ共有と、一緒に取り組みたいプロジェクトアイデアの充実と絞り込み

ファシリテーター

吉澤卓

1974年東京生まれ。ビッグバン・ハウス株式会社チーフプロデューサー
NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)理事
2005年の愛・地球博で、万博史上初めてNPO/NGOが出展した地球市民村事業の事務局として非営利セクターをコーディネートした。2009年、横浜開港150周年記念事業である開国博Y150では、ヒルサイド市民創発事業を中心とする参加型事業の展開を企画実施し、同年の横浜市都市経営局主催の市民参加型都市ブランド構築事業「イマジン・ヨコハマ」でも、参加型の事業プランニングに従事するなど、公共における参加型のスキーム展開を企画・プロデュースしている。

ゲスト

池田誠

財団法人北海道国際交流センター 事務局長、ESD-J理事

5. 開催都市(地域)プログラム

本ワークショップ ご案内

「ESDの10年」の最終年會合の開催は、開催都市にとって、ESDをより普及させるための再考の戦略的舞臺となります。
市民・県民が、生活の身近でESDを創発させるための「交流」と「対話」の場づくりとして何をなすべきかを共に計画します。

これまでの検討 ダイジェスト

開催都市に立候補している各都市・地域は、これまで独自のESD振興策やイベント受け入れの体制づくりを個別に検討しています。
今回は、「開催都市(地域)プログラム」を共同で議論する初めての「場」となります。

本日のミッション

＜課題・論点＞

ESDの戦略的発展を促進させるプログラム形成とは？

＜獲得目標＞

開催都市(地域)として、戦略的に取り組むべきプロジェクトを具体的に企画します。

ファシリテーター

福井昌平：

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム事務局長兼任理事。企業、都市、行政の経営戦略としてのコミュニケーション計画の重要性を提唱して、1985年に(株)コミュニケーション・デザインングを創業。1991年に(株)コミュニケーション・デザインング研究所を創立させ、コンサルタントから実践プログラム開発までの一貫サービスを展開している。2005年日本国際博覧会(愛・地球博)チーフ・プロデューサー、平城遷都1300年記念事業協会チーフ・プロデューサーを歴任。現在は、韓国「麗水国際博」日本政府出展事業総合支援業務推進プロデューサー、葛西臨海・環境教育フォーラム事務局局長も務める。

ゲスト

ESDを戦略的に推進している地域(RCE)で、「最終年會合」の開催都市(地域)に名乗りを上げている都市・地域の関係者がゲスト出演する予定です。

6. サイバーネットワークプログラム

ESDの「フロー情報」をデザインする

本ワークショップ ご案内

ESDの浸透・普及・啓発には、良質なコンテンツにより構成された「ストック情報」に加え、現代人の情報接触形態に沿った「フロー情報」を、ライフスタイルの中で展開する工夫が必要と思われます。

本ワークショップでは、i-pad専用アプリケーション「Flipboard」を活用しながら、良質なフロー情報の構築、及びそのテキストとしての可能性を検証し、同時にESDの浸透・普及・啓発に不可欠な「フロー情報」のあり方について検討を図ります。

これまでの検討 ダイジェスト

- 現代人の接触する情報には、「フローの情報」と「ストックの情報」という側面があり、双方を使い分けてライフスタイルが成立している。
- その中で、ESDの浸透・普及・啓発には、「フロー」と「ストック」の情報を、相互に最適化させながら発信することが重要。
- 但し、NGO・NPOの活動を俯瞰すると、どうしても「ストック情報」の充実に情報発信が向かってしまい、「フロー情報」自体が存在しない状態に陥ってしまう。
- そのため、近年台頭しつつあるツイッタークライアントの中でも、SNSマガジンを志向したアプリケーション(=Flipboard)に着目。これを活用すれば、マスメディアでしか展開できなかった「フロー情報」の構築を市民側で展開できる。
- 但し、良質なコンテンツホルダーが存在しなければ、良質なSNSマガジンの構築自体が不可能。この課題は、今後さらに検討する必要がある。

本日のミッション

- 実際にFlipboardを活用し、SNSマガジンをワークショップ時間内で作ることで、その可能性と課題にアプローチするワークショップを実施します。
- ワorkshopでは、多様な学びの素材となるサイトをTWITTERにアップし、これをFlipboardで閲覧して頂き、このようなデジタル機器の活用可能性について言及していきたいと考えます。
- また、デジタルテキストの概念が変化中、SNSマガジンのアプリケーションでESDをテキスト化することの可能性についても議論を交わしたいと考えます。

ファシリテーター

中西紹一： 広告・コミュニケーション戦略開発プランナー。現在は主に、ワークショップをビジネスに戦略的に導入し、自らファシリテーターとしてワークショップを運営。日本文化人類学会会員。日本教育工学会会員。「ワークショップ - 偶然をデザインする技術(宣伝会議、2006年)」編著者。

ゲスト

今井麻希子： (株)yukikazet代表。コンサルタント・執筆/翻訳者。言語感覚の異なる現場を結びつけることをテーマに活動を展開。情報発信を通じた社会活動に携わる傍ら企業や個人を対象としたコンサルテーションを提供している。国連生物多様性の10年市民ネットワーク事務局、東日本大震災支援全国ネットワーク広報チームなどに所属。